

トルコのデモと民主主義 —トルコ報告—

執行役員 中濱 慶和

はじめに

わたしとトルコとの関係は、1999年のマルマラ地震（我が国では、トルコ地震。因みにトルコでは兵庫県南部地震を、神戸地震と云う）以来からで、トルコとの往復は21回になる。その間、観光に行ったのは、男声合唱団の一員として訪れたカッパドキアの1日だけで、残りの205日は、地震被災者支援を中心に、日本の現代美術作品による展示会、美術講演会、美術、演奏、合唱、舞踏、写真、映像、防災後援・シンポジウムと様々な活動を行ってきた。一貫して「こころのパン」プロジェクトと名づけてきている。活動分野は、被災者支援、防災講演を核としながら、美術、芸術、教育、経済、文化と広がりを見せ、2010年のトルコにおける日本年を契機に、3000本の桜を植樹する運動も続けている。

10の100万都市

この間のトルコは著しい成長を遂げてきた。人口は99年当時、6336万人であったが、12年には7489万人と1100万人増加し、今日では100万人以上を擁する7都市に人口の35%が居住している。我が国の100万都市への人口集中は27%であるから、圧倒的な大都会集中型である。なかでもイスタンブールは、99年には1100万人には至っていなかったが、今や1300万人のメガ都市であり、超高層マンションが、郊外に林立している。朝夕のラッシュ時にボスポラス海峡に架かる2本の大橋を渡るには、2時間以上掛かることもしばしばで、通勤者は嘆くよりも諦め顔である。現在海底トンネルを造っているが、この発展振りでは、完成の暁には、さらに数本の大橋が必要と云われている。

目覚ましいトルコの発展

平均年齢は29.2歳と、我が国の43.8歳に比して、若者で溢れる国である。失業率は9.21%（ランキング37位）であり、大きく改善はしていないが、周辺諸国に比べて低位にある。経済規模は、名目GDPが99年の24.96百億ドルから12年には79.45百億ドルと3.2倍に増加、世界ランキング17位に躍進してきた。2010年では、既に欧州7位となっている。2002年11月から、公正発展党（AKP）が政権を担い、2003年3月より、レジェップ・タイイップ・エルドアン党



昼間のデモ集会 殊更大声を上げるでもなく静かな集会

首が首相となり、今日まで10年の長期政権の下で、経済、外交において、トルコをイスラム国家のなかではもとより、西欧諸国においても、際立った存在に位置している。2010年12月17日、ひとりの若者の焼身自殺に端を発したチュニジアでの、いわゆるジャスミン革命（ジャスミンはチュニジアを代表する花）と云われた民主化運動が、瞬く間にアラブ諸国に波及して、チュニジア、エジプト、イエメン、リビアでは、政権が打倒され、アルジェリア、モロッコ、サウジアラビア、ヨルダン、レバノン、バーレーン、クウェート、オーマンでは、内閣崩壊、総辞職等政治改革が多くの血が流される中で実現した。シリアでは、事実上の内戦状態にある。こういった国々は、イスラム国家で最も発展、安定しているトルコをモデル国家として、政治の安定を図り、経済の復興、発展を目指そうとするだろう。

イスラム諸国のなかで、政治経済面で最も安定して発展している、そのトルコで思わぬところから火が点いた。発端は、今年2013年5月27日、100人ほどで始まったイスタンブール建築家会議所のデモだった。

奇しくも6月上旬からトルコに滞在したことで、今回の抗議デモの一部始終を伝聞することになったので、まずこの発端から目を追って辿ることにする。日本ではデモの喧騒や催涙ガスの場面が強調されて、トルコへの誤解も聞き及んだので、現場で感じたことを伝えて正しておきたい。

イスタンブールの一角の公園から

今から1年半前に都市再開発計画の一環として、イスタンブール新市街の中心にあるタクシム広場周辺に歩行者専用道路を設置するために、広場に隣接するゲジ公園の600本の樹木を伐採する計画が持ち上がった。それに対してイスタンブール建築家会議所が、環境破壊を懸念して反対、政府に要望を伝えてきた。しかし要望は聞き届けられず、ついにブルドーザーがゲジ公園に投入されようとしたために、建築家会議所はメンバー100人が座り込みを始めた。5月27日のことである。

翌28日に野党や反対勢力者や若者らが加わったところへ、警官隊が強制排除を実施、事態は思わぬ展開を見せることになる。ロイター通信が赤いワンピースを着た女性に向かって催涙ガスを発射している写真を配信したことから一気に市民の怒りに火をつけた。建築家会議所会頭が云っているように「(当初は)純粋に環境破壊反対の思いで、反政権では全くなかった」。29日未明にはさらに警官隊がこともあろうに、学生が泊まっていたテントを焼き払うに至り、30日には1千人規模、31日には数千人超と日増しにデモへの参加者が増え、首都アンカラをはじめ、イズミル、リゼほか77都市にも拡大、警察推計で100万人が参加することになる。まるでトルコ全体がデモで覆われているように思えるだろうが、夜間のタクシム広場（イスタンブール）やクズライ広場（アンカラ）を除いて、観光ツアーは、変わりなく楽しんでいたし、ビジネスもほとんど支障は生じていなかった。



デモ行進はカラフルで派手
イステクラル通り



デモ隊のテント群
ゲジ公園

警官隊が火を点けた

3 1日には警官隊が催涙ガスや放水、ゴム弾をデモ隊に浴びせて、強制排除を実行した。海外では多くデモ側が火を点けるが、今回は取り締まる側の警官隊であったことから、政府は火を点けたのは誰かが分かるまでに5日を要してしまった。6月1日に警官隊は一旦ゲジ公園から撤退、エルドアン首相は1日夜に警官隊が催涙ガスを使用したことは過ちであるとしたが、デモによる抗議活動はその後3日も続き、夜には警官隊が再び催涙ガスや放水銃で対抗、南部ハタイ県では野党・共和人民党（CHP）青年部の男性がデモ中に何者かに銃殺されて死亡した。そのため反政権デモのなかには、与党・公正発展党（AKP）の地方事務所に火炎瓶を投げ込まむなど一部暴徒化した。内相によるとこの時点で235のデモが行われ、1700人以上が拘束された（その後多くは釈放された）。

4日から2日間は24万人が加盟する公務員労働組合連盟がストライキに入った。このころから毎晩9時になるとフライパンを叩いて、デモへの共感を示す運動も全土で定着するようになる。エルドアン首相は3日からモロッコ、チュニジアを訪問に出かけ、7日未明にイスタンブールに帰国するが、首相支持派は1万人が空港で氣勢を挙げたことを契機に首都アンカラ、イスタンブールなど各地で大規模デモが開催されるようになる。一方、反政府デモは9日夕にタクシム広場とゲジ公園を中心に最大規模の10万人が集まったが、11日には政府としても看過できないとして強制排除が行われ、数千人規模の衝突が発生した。

首相とデモ隊との会談

翌12日には首相は、まずデモの被害を訴える自営業者団体と、次いでデモ隊の代表とアンカラで会談して、ゲジ公園再開発計画は、住民投票で是非を問う考えを示すなどしたが、代表が映画監督や俳優、大学教授など11人であったため、デモの中心となっている「タクシム結束プラットホーム」は「我々と無関係な人たち」でデモ隊を「分断する」も

のとして呼びかけを拒否した。このためエルドアン首相は13日アンカラで開催された与党・公正発展党（AKP）の会合で、公園からデモ隊を排除して「きれいにする」と宣言し、「これは最後通告だ。父母は子供たちを（公園から）呼び寄せてほしい。ゲジ公園は市民のもので（デモ隊という）占拠者のものではない」と表明した。

しかしながら、首相は13日夜から14日未明にかけて4時間にわたり「タクシム結束プラットホーム」代表を首相公邸に招いて会談した。会談では裁判所がゲジ公園の再開発反対の差し止め訴訟の判決を出すまで工事は一旦中止する、さらに警官隊の不適切な暴力についても内部調査を約束するなど「歩み寄り」が表明されたため、プラットホーム側は「前向きな提案だった。民主主義と環境保護のための運動は意義があった」と評価した。しかし、持ち帰っての検討の結果、再開発計画の撤廃、警察による拘束中のデモ参加者の釈放、一連の衝突による死者発生に対する警察幹部の責任追及に応じなかったとして、ゲジ公園からの退去を拒否、今後のデモ継続を表明した。デモには160もの団体が参加していたために、首相と会談した「タクシム結束プラットホーム」が収束に向けてまとめ切れなかったことで、事態は最終段階を迎えることになった。

結局、デモ隊は15日夜も数千人の大規模デモを行ったため、警察当局は同夜、「退去しなさい、時間切れです」の拡声器の声から始まり、ゲジ公園のデモ隊を催涙ガスと放水で強制排除した。デモ隊はほとんど抵抗することができず、公園の外に押しやられた。公園に面している高級ホテルである「ディヴァンホテル」は逃げ惑う人々を警官を排除しながら受け入れた。一夜明けてゲジ公園に重機が入って、テントなど一切が撤去された。

エルドアン首相は16日、イスタンブールでの支援者集会で、デモ参加者を「非合法的な抗議活動」と非難し「広場と公園は市民に明け渡された」と強制排除への正当性を強調し、「（少数意見は）十分に聞いた」「話し合いはすべて終わった」「（国民に）集会の自由はあるが、指定した場所に限られる」「政府を倒したければ、（デモでなく）選挙で示すべきだ」と述べた。また15日の首都アンカラでの支援者集会では「今日は来年3月の統一地方選に向けた最初の一步だ。デモを支持する政治勢力は8ヵ月後に代償を払うだろう」と演説した。

「沈黙のデモ」が始まる

トルコ医師会では当初からの一連のデモにより、全国で7500人が負傷し、警官1人を含む5人が死亡したと発表した（8月1日に至って死者は6人）。その後、22日にも数千人のデモ隊が、タクシム広場を中心にエルドアン首相の退陣をシュプレヒコールで繰り返したが、警官隊による催涙ガスと放水で強制排除が実行された。しかし、ほとんどのデモ参加者は暴力を避け、「スタンディングデモ」「サイレントデモ」で静かに街頭に立ち尽くすようになった。アルンチ副首は、この新手の抗議活動を「意義深い」と評し「奨励されるべきだ」と付け加えた。

トルコの民主主義

デモとしてはほぼ一月ばかりのエネルギーであったように見えるが、タクシム広場からのメッセージは、市民の間に根づいた民主主義を感じさせた。国が二分されて現在予断を許さないエジプトやシリアとは違う。タクシム広場は（シリアの）タハリール広場ではなかった。最初の大規模デモのときに「2万人の人々が家を出た（デモに参加した）」と若者らが表明したときに、エルドアン首相が「自分の呼び掛けで20万人が家から出てきたらどうするのか」と揶揄し、ついには「(わたしに投票した国民の)50%が出てきたら大変なことになる」と発言したことに対して、デモ隊が「そうなのか、(エルドアン首相は)投票した50%の人のための首相に過ぎないのか」と言い返したという話を聞いた。

当初、筆者は、首相は失言した、これでみずから国民の50%を反対派に追いやってしまったと、感じた。しかしながら、今は考えが違う。エルドアン首相の発言は、民主主義の理解の上での発言であったのではないかと思っている。民主主義では、50%プラス自分ひとりが加わることで過半数となり、提唱する政策をみずから推し進めることができる。民主化運動の体験が浅い「アラブの春」の国々で、例えば今のエジプトで見られる光景には、支持者100%を抑えなければ、政治の安定は望めない、安心できない、物事が進まないという不安、危惧が裏打ちされているのではないか。だから軍隊を使い、実弾でもって100%全体を抑えようとする。軍の力や原理的な宗教の力を頼ろうとする。100%なるがゆえに、もと来た独裁の道に戻ることにならないか。トルコの民主主義は違うのだと、エルドアン首相は訴えていたのかもしれない。民主国家におけるデモだから、その最中であっても首相は、海外に出かけたのではなかったか。他国ならば、クーデターや政権転覆を危惧して、飛んで帰国しただろう。2002年以来、首相の座にあって、緊縮財政や金融構造改革を断行して大変なインフレをなんとか押さえ込み、現在のトルコに安定的で確固とした成長をもたらしている自負と自信も持ち合わせているだろう。

抗議デモの原因と今後

しかし、なぜひとつの公園の樹木を伐採することへの反対運動から全国77都市でデモによる抗議活動が引き出されてしまったのか。600本の樹木を伐採し、その跡に建設しようとしたオスマン帝国時代の兵舎をかたどったショッピングモールの上に、そのような抵抗や抗議を引き起こすエネルギーが秘められていたとは思えない。よく報道された、酒類販売の制限とか、それに先立つ大学での女学生のスカーフ着用禁止令の解除とか、地下鉄や講演でのマナーへの言及などの積み重ねが、世俗派の人々に不安や危惧の高まりを感じさせたことも要因と考えても良い。野党を初めとして、現政権党が保持し続けてきた長期政権への苛立ちを感じてきた市民派層が好機と捉まえたこともあるだろう。なにしろデモには160もの団体が参加したといわれているので、デモ参加の理由すべてを把握はできない。家族で参加している姿があり、自転車で通りすがりの参加があり、鼓笛隊の行列やクラシック演奏も加わっていた。トルコのデモは民主的なデモだからである。

樹木の伐採と公園の再開発は、裁判所の判決で棚上げされたことで、デモの初期の目的はかなえられた。政府は、他国に見られるような国の存続を停滞させ、危ぶませる事態を避けることができた。デモの終盤に見せたサイレントな部分を政治の場面で表していくことが、イスラム国家としての民主主義の証明につながると感じている。トルコはイスラム諸国のモデルとしての期待に応えていこう。



鼓笛隊も参加